

臨床心理士を目指す大学院生の、大学院での学びを通じた傷つきにまつわる体験との付き合い方の研究

M-GTA を用いた質的研究

柏 木 雄 太

(人間科学研究科 人間科学専攻 臨床心理学研究領域 博士前期課程 2 年)

Research on how to associate with and handle experience related to wounds through graduate school learning for graduate students who want to be clinical psychologists.

Qualitative research using M-GTA

1. 問題・目的

近年、我が国では臨床心理士を目指す人口は増加傾向にある。土居（1991）は、臨床心理士の専門性について、人間性を土台にしないような専門性では意味がなく、人間性と専門性は相補的な関係にあると述べている。大学院では自己省察が求められる。その反応の内の1つに、傷つくというものがある。臨床心理士として成長していくためには傷つきにまつわる体験と付き合っていくことも大切である。本研究では、臨床心理士を目指す大学院生の養成課程（2年間）において、学びを通じた傷つきにまつわる体験との付き合い方の変容プロセスを明らかにし、モデルとして生成することを目的とする。

2. 方法

本研究の分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いる。木下（2007）によると、M-GTA は社会的相互作用に関係する人間行動の説明と予測に優れ、限定された範囲内の分析に力を発揮する。今回 M-GTA を用いる理由は、本研究が M-GTA の理論生成、社会的相互作用、プロセス性、実践的活用という 4 つの理論特性に合致していると考えられるためである。調査対象者は臨床心理系の大学院を修了し、修了から 3 か月以内の者を目安に 10 名とした。なお、事前に「研究倫理遵守に関する誓約書」の内容を説明し、同意書に署名を得たもののみを調査対象者として、60～90 分の半構造化インタビューを行った。面接を録音し、その録音データから逐語記録を作成した。その中でもっとも多彩且つ一般的であると考えられる内容を語るものを最初の分析対象者に設定した。分析テーマと関連する箇所を抽出し、それらを概念とし分析ワークシートを作成した。それぞれの概念に類似した具体例を逐語記録から抜き出し、バリエーションとして分析ワークシートに追加した。全てのデータ分析終了後、その具体例が多い概念は有効であると判断した。また、恣意的な解釈を避けるために、類似例のほかに対極例を検討し比較分析を行

い、共同研究者の確認と指導教授のスーパーバイズを受けた。生成された概念同士の関連を検討しサブ・カテゴリーでまとめ、サブ・カテゴリーの関係性を検討してプロセスの流れを結果図で示し、ストーリーラインを作成した。

3. 結果

M-GTA による分析により 16 の概念、5 つのサブ・カテゴリーにまとめられた。概念とサブ・カテゴリーの関係からストーリーラインと結果図を作成した。なお〈〉は概念名、《》はサブ・カテゴリー名である。

臨床心理士を目指す大学院生は初期に、〈授業での分からなさを不安に思〉う。そして、今までの頑張る一辺倒であった価値観だけではない価値観と出会ったり、臨床心理士としてある自分と大学院外の自分が混ざったりする現象の〈臨床心理文化との出会いによるショック〉を受ける。そして、外部実習で現場を目の当たりにしつつ、どう行動していいのかわからない感覚である〈外部実習で意思決定に戸惑う〉経験をする。ケースを持ち始めてからは、自分がカウンセリングを上手く行えているのか、上手くいっていないのかすらわからない〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉と接することで《臨床心理学文化の入り口に立》つ。また、ケース場面では〈SVor. の助言を鵜呑みに〉してしまい、SVor. の指示の意味を自分の中で理解できていないままカウンセリングに臨むことや、クライアントにとってタイミングの良くない介入をしてしまい相手を傷つけてしまう。他にも自分の未熟さ、経験不足さによりクライアントを傷つけてしまったり、中断させてしまったりした経験から〈ケースを通した自分の未熟さに傷つ〉く。それらを通し《ケースに出る未熟さ》と直面する。中期では2つの概念からなる、《未熟さから起こる学びの滞り》が起こる。カンファで自分が傷つくことを恐れ発言できない〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉が1つ目の概念である。そして実習先やSVの時間、同期とのコミュニケーションなどで、自分にある課題に目を向けられずに怒りの感情へと変換してしまい内省へと向かわない〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉が2つ目の概念である。また、初期から築いてきた臨床観と異なる現実を実習場面で見ること〈自分の臨床観と現実の差に傷つく〉。そして教員側の要因によって構造が守られず、院生が傷つく〈構造が守られないことから生まれる傷付き〉が起こる。終期では、カンファ中に発表する際に後輩や教員から見られる際にプレッシャーを感じる〈時間経過に見合う人になれているかの不安〉を経験する。また、大学院での学びだけでは一人前の職業人として耐えられないと感じる〈未熟なまま職業人として進みだす不安〉を経験する。この2つの概念から、《時間経過による不安と焦り》を経験する。また、実習などその場その場での〈忙しさによる自己内省の余裕のなさ〉を経験するものの、それとは対照的にこれまでの2年間で整理されてきた自分の課題と直面する〈薄々分かっていた自分との直面〉を経験し、入学前と比べて変わってきた自分に対し少し寂しく感じたり、受け入れがたさを感じたりする〈自己変容へのストレス〉を経験する。《深化する自己内省に伴う痛み》を経験し、大学院を修了する。また、初期、中期、終期通して〈仲間という安全地帯へ一時避難する〉ことで、傷ついても安全な場所から傷つきや傷つきのも

とになった出来事を観察し、現実に戻っていく過程が示唆された。

4. 考察

院生は大学院の中では失敗や、できないことを多く経験する。初期では《臨床心理学の文化の入り口に立つ》ところで臨床心理文化の価値観や、実習でどう振舞ったらいのかなど、初めて出会うものに順応するために傷つきにまつわる体験を経験することが示唆された。また、《ケースに出る未熟さ》ではクライアントを傷つけてしまう自分に対して、傷つきにまつわる体験をすることが示唆された。初学者としてはこうした経験、不安を持つというのは本来当たり前の事なのである。しかし、それはこのままでは臨床心理士になれないのではないかという不安との直面を意味する。そうした体験の処理には今の自分の在り方の否定も行われるのではないだろうか。今の自分の在り方の否定は自己愛への脅威となるために、中期には〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉という現象が起こっているのではないだろうか。この現象は臨床心理士を目指す大学院生にとっては重要な概念だと筆者は考える。富樫（2019）によれば、Kohut は自己愛憤怒には一時的に自己の断片化や崩壊を防ぐ機能があると述べている。今の自分の在り方の否定とは自己の断片化や崩壊の危機と言える。これは、〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉で院生には自己愛憤怒が生じており、その危機から身を守っていると示唆された。インタビュー対象者の語りではケース、実習、院生同士の関係等で起こっていることが語られている。これから院生になる人にもこの現象が起こることは考えられる。こうした現象が起こることを知っておくことは意味があることだと考えられる。

【引用文献】

- 土居健郎（1991）専門性と人間性. 心理臨床研究. 第9巻(2), 51-61.
- 木下康仁（2007）.『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラントッド・セオリー・アプローチのすべて—』 弘文堂.
- 富樫公一（2019）. 我を生かすために他者を破壊する—自己愛憤怒 臨床心理学 第19巻(1), 48-53.
- 割澤靖子（2016）. 臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究 教育心理学研究 64(1), 41-58,

指導教員 新田泰生